
junction

雨.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

j u n c t i o n

【Nコード】

N 9 2 2 0 A

【作者名】

雨・

【あらすじ】

駅ですれ違ったり、電車で隣り合わせになる見知らぬ人々。隣にいる人は何を考えているのだろう、と思ったことはありませんか？駅や電車で一瞬だけすれ違う人々の時間を少しずつ切り取った、短編集です。五話目に『チバリヨウ』という短編のシリーズ物も含まれますが、そちらをご存じなくともお楽しみいただけると思います。

1人目の別れ

大してなんとも思っていないような顔をして、彼に別れを告げた。

「ばいばい」

ふつと笑って笑顔の横に右手を上げ、優しく揺らしてみせる。

私の目はきつと今、三日月の形をしているだろう。作り物の笑顔の形。

「ほら。そろそろ電車来るよ?」

彼の後ろに見える電光掲示板に取り付けられた時計は30分を指していた。電車の出発時刻は32分。本当に、もうすぐ行ってしまふ。

時計を見ている振りをして、彼の顔を盗み見る。それは一言で言えば『複雑そうな』顔。眉をしかめて、口を真一文字に固く結んでその瞳は私を見ているようで周囲を見ているようで、うろろろ落ち着かない。それこそが彼らしさ、なのだ。うろろろ、ふらふら落ち着かない可愛い男の子。その可愛さに、守ってあげたくなるようないじらしさに、惹かれたのだから。

「……俺」

「じゃあね」

「待つて」

私はゆっくりと首を振る。今ここで二分間話し合ったところで何

になるだろう。

電車を待つ列の最後尾にいたはずの私たちが、いまや列の中盤に位置している。それほどの時間を沈黙で費やしたというのに、二つ間で何が生まれるというのだろう。

あなたのその可愛い瞳に私は何度決心を揺るがされたことか。でももう、それに区切りをつけなきゃいけないのだ。

「俺たち、もう……だめなの？」

とんでもない風圧と共に、ホームに飛び込んできた電車の音が彼の言葉をかき消す。

私は聞こえない振りをした。

「じゃあ、元気で」

「待つ……」

電車からたくさんの人が溢れて、彼はその波に飲まれた。ふわふわとした彼は波に逆らえない、それに漂うだけ。たくさんの人の肩にぶつかり、舌打ちをされ、にらまれながらもしつかりと立っている私とは違う。違うのだ。

出てくる人の波がやんだら、今度は席取り合戦に走る人の波に彼は引き込まれた。いや、引き込まれそうになっていた。

「
」

飲み込まれる寸前に彼の口が、私の名前を象る。

でもそれも波に飲み込まれ、ふらふら、うろつろ。消えていった。私はその消える姿を見送ることなく、人でごった返す電車に背を向けた。

振り向いてはいけない。 立ち止まっではいけない。

階段を駆け上った後も、足元だけを見てひたすら歩く。手を強く握り、腕を大きく振る。俯きながら、とにかく前進していた。改札の方向に向かっているのか、それもよくわからない。

たくさんの人とぶつかりながらも、それでも歩き続ける。とにかく、止まっちゃ駄目だ。その強迫観念だけが私を歩かせていた。進まなければ、囚われてしまう。何に？ 何かに。

何かを考えるのは大事ではない。今は無心で歩き続ける事が重要だ。

その私のつま先に、白い壁のようなものが立ちはだかった。いきなり進むべき道を塞がれて、私は立ち尽くす。

立ち尽くした私の足元に、待ってましたとばかりに雨が降る。

いつの間にか泣いていた。

ぼとぼと、私の涙が自重に耐え切れず落ちていく。

顔を上げると、世界で一番不幸な女の顔が目の前にあった。

……鏡。証明写真をとる機械の鏡だ。涙はぼろぼろと止まることを知らない。

私はその小さな箱に飛び込んで、カーテンを引く。そして溢れるものに身を委ねて、大声を上げて泣いた。

彼の呼んだ私の名前。ふわりふわりと私に絡みつき、離れない。それどころか私の心臓をゆっくりとでも確実に締め付ける。だから、止まっではいけなかったのに。

発車を知らせるベルの音が遠く小さく鳴り響いていた。

2人目の人間

ヒールの高いサンダルは、走ると甲高い音がする。周囲の人が顔をしかめるのと同じように、あたしだってこの嫌味な音が大嫌い。だから普段はなるべく音を立てないようにして歩くけれど、今はそうも言っていられない。そんなことしていたら電車乗り遅れちゃうから。

右、左、右、左。転ばないように、ケータイの時計とにらみ合いながらも精一杯走る。

証明写真の機械の前を通ったところで、明らかにおかしな声があった。

女の人の泣き声だ。カーテンの隙間から、白い綺麗な靴と細い足首が覗いていた。

……泣いている、中で誰かが。

右足、を出す前に、あたしは動きを止める。

右手に握っていたケータイを見ると、電車が来るまであと1分。ここから階段まで走って、降りて……。瞬時にあたしに残された時間を計算する。だめ、間に合わない。あたしはすぐに右足を前に出して、また走り出した。その音が、泣き声を踏み潰すようにしてかき消した。

駆け込み乗車は危険ですというアナウンスを無視して、閉まりかけたドアに強引に体をねじりこむ。周囲の人の嫌な顔を横目に、無理やりに電車の中側にまで移動した。相変わらずこの満員電車には辟易する。はあ、とひとつため息をつく、隣に立っている女性がちらりとこちらを見た。

仕事帰りのOLといった風体のおばさんに、あの細い足首を思い

出す。高そうな靴を履いていた。あの中で泣いていたのも、このおばさんくらいの女性なのだろうか。

……何で泣いていたんだろう。あんなところで、ひとりで、大声で。何かを失ったのだろうか、恋人とかお財布とかケータイとか。彼女の泣き方はそういう感じだった。そしてあたしは最低だ、電車なんて10分も待てば次のが来るのに、結局自分が大事なのだ。泣いている彼女を放っておいてまで電車に乗ったのだから。嫌な女。最低な人間。この電車に乗っている人間の中で一番最低だよ、あたしは。

電車が本格的に速度を上げ、あたしの体も大きく揺れ始めた。隣のおばさんやサラリーマンと体がぶつかり、剥き出しになっている肌に蒸れた肌が触れる。

鳥肌と共になんともいえない苛立ちがあたしを襲う。それから逃れようと、右手に固く握っていたケータイを開いた。

『満員電車まじきついよ。まあ、皆いなくなればいいのに！ 早く、ヒロに会いたい』

そこまで打って送信する。

送った後に見直すと、自分の最低さがありありと表れているメールに少しおかしさを覚えた。やっぱりあたしはいつでもどこでも自己中心的なのだ。

すぐに返信が来る。

『皆サン仕事でお疲れなの。そんなこと言わず、頑張れ！ 駅では

俺が待つてるしさ！笑』

ヒロの返事に、一気に癒される。そうだ、ヒロはいつも改札の前まで迎えに来てくれる。もしそのお迎えがなければ、ううん。ヒロという最愛の彼氏がいなければ、あたしはこの箱の中でとうの昔に死んでいただろう。

ふと、あの痛々しい泣き声が耳元によぎる。

『ありがとう。ヒロ、これからもずっと、迎えに来てくれる？　こんな最低なあたしだけど』

送信ボタンを押しながら、もう一度読み返す。

ずっと、なんて。重かったかな。重いよね。

しかもなんかウザい。『最低なあたし』なんて言われた方は迷惑極まりないに違いない。

やっぱ送るのやめよう！

しかし、取り消そうとしたときには既に送信済みの画面が表示されていた。色々ボタンを押したせいで隣のおばさんに強く肘が当たってしまい、おばさんも負けじと押し返してくる。そんな満員電車では当たり前の現象も、ひどくあたしを落ち込ませた。

どうしてだろ、今日はいつもよりも車内が息苦しく蒸れているように感じる。メールなんて、後悔するくらいなら送らなければよかった。

そう思ったときに、ケータイ画面がメールの受信を知らせた。

『当たり前。最低でも何でも、大好きだよ。てか最低じゃないけど。最低だって自分のこと嫌いだって思えるうちは、まだ最低じゃないよ。多分。てゆうか、俺以外の男が迎え行くとか許せんし！ それよりお前可愛いんだから、痴漢とか気をつけるよ？』

ヒロのメールに、強張っていた頬が優しく解けて、あたしは自然と微笑んでいた。

そして同時に少し悲しくなる。

最後の一文。やっぱりヒロも自分中心に物事を考えているのだ。それが人間というやつなのかもしれないけど、目の当たりにするとやはり切ない。それともあたしの考えすぎ、かな。

でも。その自己中が、こんなにも嬉しいなんて人間というのは困ったものだ。

今のあたしの心の中は、ヒロに早く会いたいという気持ちで溢れかえっているのだから。

ヒロの胸の中で、彼女の事を話そう。証明写真の撮影用機械のなかで、ひとり泣いていた女の人の事を。そしてせめて彼女に、ヒロみたいな人が迎えにきてくれるようにと願おう。たとえあたしの独りよがりな偽善でも。

その途端、電車がカーブに差し掛かり大きく揺れる。隣にいたおばさんはバランスが取れなかったのだろう、思い切りあたしに押し掛かってきた。重い。けれど強引に押し返す事はせず、自分の体でしっかりと支えてやる。先ほどまで肘を押し合っていたあたしにしては上出来な反応だと思う。しかしおばさんはそれに気づいているのかいないのか、すぐにつり革につかまってあたしから離れた。

ま、気づくわけではないよね。彼女のおかげで少し足首が痛くなったあたしは、どうせならやはり押し返せばよかったと胸の中で毒づく。

あたしの親切なんて、あってもなくても同じなのかもしれない。独りよがりなあたしなんか……。

「すみません」

声の方に顔を向けると、今しがた支えてあげたおばさんだった。それだけではない、おばさんは合わせて目礼までしてくれた。

あたしは思わず微笑んで、とんでもないですと答える。すぐにおばさんは視線を前に移したが、彼女の声はずっとあたしの中で響いていた。

よく、わからないけど。たかだかおばさんの一言がとてつもなく胸に染みる。

人間って、やっぱりそういうものなのかもしれない。

目的の駅まであと3つと迫っていた車内は、何故か先程よりもすがすがしい空気で満ちていた。

3 人目の妄想

電車は嫌いだ。

正確には人の多い電車に乗ることが、嫌いだ。特に、夜仕事を終えたサラリーマン達で今にも破裂しそうなほどパンパンに詰まっている電車での帰宅は大嫌いだ。

真つ黒な窓に映る自分の不愉快そうな顔は、とても醜く、脂と化粧が浮いていた。今すぐにも脂取りシートで顔の汚れをふき取りたい。だが腕を動かす事すらままならないこの箱の中ではそんなことは不可能であった。

電車の音に紛れてひとつ舌打ちをすると、隣の男が明らかにいやそうな顔をした。

私はそんなに小さいほうではないと思う。それでも隣の男は私より頭一つ分大きくて、この狭い電車の中、皆よりずっといい空気を吸えているのかと思うと、少し憎らしい。

目の前見えるのは密着して立っている親父の後頭部。人間なんでも慣れるものだというが、この景色にはとても耐えられそうにない。しかも独特の加齢臭。思い切り手で突き飛ばしたい衝動を抑えこむ。私の右隣、つまり背の高い男とは反対がわには、遊び帰りであろう若い女の子が携帯をいじっていた。こういう場所で携帯を開くという行為がつくづく私には理解できない。公衆の目の前で自分の私生活をさらすようなものだ。

私はその子のメールをさっきから5通は読んでいる。相手は彼氏。満員電車に乗っちゃった、と嘆く彼女に痴漢に気をつける、お前可愛いからなんてふざけた事を繰り返している。ああ、いらいらする。

その女の子はこの狭いのに携帯をいじっているから、さつきから肘が私に当たっているのだ。クーラーがついているとはいえ、この人数。ねっとりとした人の体温がとても気持ち悪い。

後ろに立っている男の鞆の角もさつきから腰に当たっている。

ああもついらいらいする、私は何でこんなところでこんな思いをしているんだろう、視線を上げると姿見となった窓に、泣きそうな顔をした自分が映っていた。

前に立っている親父の肩から覗いていた顔は、すぐにまた親父の後ろに重なって消えた。

降りるまでの我慢だ。そう言い聞かせてもイライラはあまり収まらない。

こういうときは意識を飛ばすのが一番いいのだ。もう1年近くこの満員電車を体験する中でどうにか生み出した逃避方法だ。窓に見え隠れしながら映る自分の目を見ていると、それがだんだんと虚ろになっていくのがわかる。

意識を飛ばす、というより妄想するのだ。例えば隣に立っている男。彼はもしかしたら営業マンで今日も会社を何十社も回ってきたのかもしれない。何十冊ものカタログと愛想笑いと共に。その中で散々罵倒されもしただろう。昼には少し贅沢して少し高めの缶コーヒーを、タイを緩めながら飲んでいるに違いない。ほんのひと時の休憩。でもその間にも不安は決して休まない。

会社には戻らない。いや戻れない。契約取れるまで戻ってくるな、という上司の言葉が帰社を許さない。今の会社には出向で来

た、本当なら俺は営業なんかじゃない、技術職で入社したのだ。いやだが、三年、三年の我慢だ。そう前の部署の上司に励まされた。でも本当に三年で本社に帰れるのか？ 契約数が部署最低の成績の自分だ。

とにかく早く本社に戻りたい。

なんてカワイソウな男。

と妄想に夢中になっていると、いきなり車体が大きく傾く。腑抜けたように立っていた私は体を支えきれずとなりの女の子のほうへ倒れこんでしまう。しかし彼女はいやそうな様子も見せずしっかりと支えてくれる。

ほんの少し嬉しくなっただけで小さな声でお礼を言うと、女の子も優しく微笑み返してくれた。意外と、いい子なのかもしれない。

つり革をしっかりと握りながら、隣の男に視線をやると、相変わらず仏頂面をしている。こんな暑苦しい中で爽やかに笑っている方がおかしいだろう。

隣の女の子はまたすぐに携帯をいじっていた。しかしその打っている文面は、さきほどとは違った。

『隣のおばさん倒れてきたよ。どうしたんだろ？！ 具合悪いのかな……。でもお礼言っただけで嬉しい！ あー早くおうち帰りたいなあ』

おばさん。それはどう考えても私のことだ。私を心配するような文面も、要は私が年老いていることの説明に過ぎない。彼女はまた他にもくだらない内容を打ち続けている。おばさんって私が。29

歳の私が？　つかみ掛かって問い質したい気持ちを、先ほどの親切を思い浮かべて何とかこらえるが、どれほどもつか自信はなかった。

しかし、どうにか衝動が爆発するより前に電車が駅に着く。心持ち女の子の体を強く押しのけて、電車を降りる。涼しい、とはいえないがしかし確実に電車の中よりも爽やかな風に、大きく息をする。

背の高い男も、同じ駅だったらしい。私の前を出口に向かって歩いていて。

ぼんやりと、女の子のおばさん発言に打ちひしがれながら歩いていると、男の靴底が目に入った。全く磨り減っていない。それどころか綺麗に磨かれたブランドものだ。スーツだって高級ブランド……。鞆もそうだ。髪もきちんと整っていて、先ほどの親父の後頭部とは全然違う。

あんぐりと口が開ききっているのに気づいて、急いで口を閉じる。改札から出て行く彼の姿は颯爽としていた。立ち止まったままその後姿を見送ると、少し笑いがこみあげてきた。

こうやって駅の改札前で突っ立って笑っていると、またおばさん具合悪いの、と思われてしまうだろうか。それかもしれないのかもしれないな、と少し思う。立ちっぱなしだったから、かかたがジンジンと痛んだ。今日は帰りに、少し高めの缶コーヒーを買って帰ろう。明日もまた、この満員電車に乗らねばならないのだから。

4人目の過ち（前書き）

少々、暴力的表現がございますので苦手な方はご注意ください。

4人目の過ち

触れ合う、には程遠い状態で僕はその箱の中でかろうじて立っていた。どうしてこつも大勢の人間をひとつの箱に詰め込めるのか。ある意味芸術的にも思える120パーセントという乗車率に、僕なんかの疑問が立ち入る隙は無い。

とりあえず隣に立つ女性に痴漢と間違われないよう両手をつり革に預けると、電車が動き出した。

その動きに前後左右振り回されながら、頭の中ではひとりの女性のことを考えていた。

松本小夜。

昨日の夜、とうとう彼女と一線を越えてしまった。30目前になつてあんなに女性の扱いに戸惑う事になろうとは思ひもしなかった。瞳を閉じれば、小夜の悩ましげな表情が鮮明に浮かぶ。こんな息苦しい満員電車の中にも関わらず興奮しそうな自分を落着かせるため、あの言葉を言い聞かせる。

小夜。僕の……妹。

いつもながらこの言葉は一気に体の熱を引いてくれる。

おまけに胃の中身を吐き出したくなるような悪寒もセットで。今日一日まともに食事をしていない僕が吐き出せるのは喉を焼く胃液ぐらいだけだ。

一ヶ月という期間だけ、東京で遊びたいということで彼女は僕の家に住候しにやってきた。今でも、あの時の衝撃は時折僕の体を強く揺さぶる。

若くみずみずしい肌、桃色に上気した頬、首筋に流れる一筋の汗、タンクトップから覗く胸、あまりに無防備に剥き出しな足、そして満面の笑顔。

全てに見とれて呆けた顔をしている僕に、彼女は優しく微笑んで僕を呼んだ。

「お兄ちゃん」と。

母からの連絡もあつたし、小夜が妹だということは頭では理解できた。

それでも体と心は言う事を聞かない。

彼女の求心力にぐいぐいと惹き付けられる自分をとめることはできなかった。

大体、突然10年近くも会っていなかった妹が、18歳の大人に成長して目の前に現れたのに、それを妹として認識しろという方が無理な話だ。

そうやって何度自分に言い訳してきただろうか。

小夜は、献身的に僕に尽くした。

彼女は毎日、朝・夜の食事を用意し、僕よりも先に起きて着るものを用意してくれる。まるで若妻を娶ったような気分初めは緊張したものだ。

彼女も、僕の存在に戸惑っているようだった。18のときに進学で家を出て以来、僕はともに帰ったことは無い。彼女の記憶の兄は高校生で止まっている。こんなおじさんが兄で、しかも一緒に暮

らしているとなると戸惑うのが当然だ。

そして都合のいい僕は、それが異性として意識している事であつてほしいと願つてやまないのだった。

小夜はよく僕の好物のハンバーグをこしらえてくれた。コンビニやファミレスとは違う不器用な形と温かさがたまらなく愛おしく、おいしかった。一口ほおばることに生まれる笑顔は、自分でも驚くほどの柔らかさだった。

一人暮らしの長い身には、いちいち彼女のかわいらしさが身に染みた。人と暮らすというだけで新鮮なのに、兄弟だからだろうか、彼女との生活はそれに安らぎももたらした。

そう、若さや可愛らしさだけではない。その安らぎも含めて、僕は松本小夜という女性に恋をしてしまったのだ。

電車が、目的の駅に着く。

ここ最近はややかだった足取りも、今日は少し重たい。地面に張り付いた靴底をはがすように、階段を登る。駅では若いストリートミュージシャンがなにやら恋の歌を拙く歌っている。その切なく下手くそな歌詞は、今の僕にぴったりだ。

僕は、一番してはいけないうことをやってしまったから。

僕は、小夜を強引に抱いてしまったのだ。

きっかけは、小夜の言葉。もうすぐ夏休みも終わる、だからそろそろ実家に帰るね、という言葉。

つまりまた僕はひとりになり、彼女と会えなくなるのだ。

わかつてはいたが、目の前でそう宣言されると予想以上に傷ついた。僕はなんて愚かなんだろうか。まるで本当に小夜と結婚したような気分になっていた僕には、それは別れを告げる言葉にしか聞こえなかった。

何かが、弾けた。

僕はその場に小夜を押し倒し、無理に口付けした。

昼夜関係なく何度も夢に見た、彼女とのキス。

でもそれは甘くも苦くも柔らかくもない。

ほとんど暴力に近い触れ方。多分、兄妹である僕らにふさわしい繋がり方だ。

小夜と一緒に、僕はテーブルの上のガラスのコップも倒してしまふ。少しだけ残っていた中身の水がテーブルからこぼれ落ちるが、それを気にする余裕はない。

当然小夜は嫌がり、抵抗する。それでも僕は止まらなかった。ただずっと、愛してる、行かないでくれ……そんなみつともない台詞を口にしていた。そして抗う小夜に、今まで高ぶっていた思い全てを押し付けた。

溢れかえる水は静かにテーブルから滴り落ち、小夜の体を濡らしていた。

全て終わった後、小夜は何も言わず泣いていた。

小夜は、僕が初めてではなかった。それが救いでもあったし、腹立たしくもあった。小夜を他の男が抱いたのかと思うと、怒りどころか殺意が湧き上がる。

僕は、言った。

愛している、と。兄なのにこんなことをして申し訳ないと思っ
ている。恨んでくれて構わないと。

愛しているとはなんてずるくて卑怯で便利な言葉なんだろう。愛

しているからって妹に乱暴していいはずがない。

次第に僕の声はか細くなり、そのうち消えた。沈黙が僕らを、やつのこと包み込む。

小夜は生気の抜けた顔で、ただ泣いていた。声もなく、静かに泣いていた。

朝起きると、朝食とスーツが用意してあって小夜は姿を消していた。

焦って彼女の荷物を確認すると、全てまだ家に置いてあった。ほとと胸をなでおろす。

スーツは、僕の持つ一番高価なものだった。何故彼女がそれを用意してくれたのかはわからない。

本当なら会社を休んで彼女を探しに行くべきだったかもしれない。それでも僕は彼女と顔を合わせるのが怖くて、食事もほとんど残したままさっさと家を後にしたのだ。

小夜は、どうしただろう。

自分の部屋のドアの前に立ち、耳を澄ませる。無論、何も聞こえない。

鞆の中からキーケースを取り出し、ゆっくりと鍵穴に鍵を差し込む。乾いた音を立ててあっさりと鍵は開いた。

小夜が妹でなかったら。そんな考え、馬鹿げてるのはわかってる。それでも考えずにはいられない。そうならば僕たちは……出会ってすらいなかっただろうか。

ドアを開け、ここ最近口癖になってきた言葉をかける。

「ただいま」

しかし返事はなく、部屋は明かりすらついていない。

「小夜？」

手探りで電気のスイッチを押す。しかし小夜の姿はない。
急いで居間に向かうと、ラップをかけられた夕食と共に一枚の紙
切れが添えられていた。

「小……夜」

予感はしていたから、涙は出ない。それでも、僕の体は力なく膝
から崩れ落ちる。

小夜は、去った。体を重ねた後の彼女の涙は、きつとそういうこ
とだったのだ。小夜の手紙を何度も読み返し、納得する。これが当
然の帰結。僕たちに未来などあるわけはなく、だからこそこんなに
愛おしいのだ。

小夜の手紙を左右の手で半分に切り分ける。それを4等分、8等
分とどんどん細かく破る。そしてゴミ箱に捨てた。

底の浅いゴミ箱には、分別など知らん顔でコップが横たわってい
た。

昨日僕が倒してしまったコップだ。取り上げてみると側面に小さ
なひびが入っていた。これでは使い物にならない。そう思って、小
夜はこれを捨てたのだろうか？

床に座り、小夜が残したハンバーグのラップを剥がす。そしてコ
ップと共にラップもゴミ箱へ捨てた。

そのままテーブルの前に腰を下ろす。ハンバーグ、恐らく最後になるであろう小夜の手作りのハンバーグと向かい合う。

箸を手にして、丁寧に一切れだけ切り分ける。落とさないようしつかりと細い木の箸で挟み込んで、それを口に入れた。

冷たい。

それからは一気に食べ進める。

すっかり冷え切ったハンバーグを食べるうちに何故か涙が滲んできた。

出来損ないの形をしたハンバーグが、輪郭を失っていく。やっぱり、ハンバーグは出来立ての、温かいものが一番いいのだ。

4人目の過ち（後書き）

少し、というか大分詰め込んだ感が否めません……。

このような作品に目を通してくださり、誠にありがとうございます。以上4作は電車内中心の短編でしたが、以降は駅を中心とした短編が続く予定です。宜しければ今後ともお暇つぶしに読んで頂けたら幸いです。

5 人目の加速

「所田と青葉ってさ、デキてんの？」

購買で買ったパンの袋を左右に引っ張りながら、伊智子が忌々しげに呟いた。

「さあねえ。でも、そうなんじゃない？ この時期にあの様子だと」

私は親が作ってくれた弁当のから揚げを箸でつまみながら答える。二ト予備軍の恋愛事情なんて、興味はない。確かに、夏休みがあげた今、受験生にとっては本格的に追い込みの時期に入る。そんなときに休み時間も特に勉強する様子も見せず何やら親しげに話しているふたりが目につくのは当然のことだ。

「うざいわー。本当。てかさ、聞いた？ あの二人……」

「何？」

伊智子のパンの袋は未だに開かないらしい。引っ張られた袋の先がかすかに震えている。

「何か、夜二人で会ってるところを誰かが目撃したらしい、よっ！」

風船が破裂するような音を立てて、袋が弾けた。皆が食事に夢中な教室では誰もその音に驚いたりはいしない。

昼休みにも関わらず、早めに食事を済ませて、問題集を開く。誰が一番に始めたのかはわからない。でも今ではほぼ全員がそう

していた。この単語集も二周目に突入し、数ヶ月前に入れたチエツクを尻目に次々と解いていく。

しかし、私たちとは別に昼休みを十分に堪能する人間だつてごく僅かだが存在する。

青葉伊鶴と、所田慶介。

噂によるとあの二人は大学受験をしないらしい。もし本当なら、最低だと思う。

この学校は進学校を銘打っているだけあつて、普通の高校より倍高い授業料を支払わねばならない。大体入学試験だつてかなりの難易度だ。

それだけではない。夏休みだつて2週間しかなかった。あとは補習という名の授業で8月は埋まる。

それなのに、親の期待を全て無視し、学生としてのわきまを放棄するような行為は、最低だと思う。

あの二人に二ト予備軍というあだ名をつけた人間の才能を褒めてあげたい。

* * * *

「後鳥羽上皇の地頭罷免要求が拒否された摂津国の荘園は何か？」

「長江荘・倉橋荘」

伊智子が軽く笑いながら答える。続いて彼女が問題集に目をやり、問いを読み上げた。

「承久の乱後、西国支配のために赴任した東国御家人を」

「西遷御家人」

彼女が言い終わる前に、答えてみせる。

私たちはこうやって問題を言い合いながら、塾の帰り道を駅まで歩いてきた。これが日課とはいえ、私たちの間には常に緊張感が走っている。相手より先に、絶対間違った答えは口にははいけないという緊張が。

目指している大学も同じで、選択する科目も同じという私たちは、受験対策を相談する相手という以上に、良いライバルだ。絶対伊智子にだけは負けたくないという気持ちで、大学へ行きたいという思いよりも私を勉強へ駆り立てているといっても過言ではない。

そして伊智子も恐らく同じ。

「ね、今日はさ、市内の本屋行きたいんだ。この問題集も大分やりこんだし。次の買わない？」

「うーん……。どうしようかな」

今の時期に新しいものに手を出すよりは、今まで使っていたものをやりこむ方がずっと良い方法に思える。けれど心のどこかで『伊智子は買うのに?』というはつきりとした声が私を躊躇させる。

「とりあえず行くだけ行かない?」

「……そうだね」

まず問題集を見てから考えてもいいかも。

心の声に抗えず、私はあっさりと伊智子に続いていつもは通過する切符売り場へ向かった。

* * * * *

市の中心地の駅は、ごった返している。

駅から近い市最大の本屋の参考書売り場を直進する。ずらりと並んだ赤本の横を通ると、背筋に嫌な汗が流れた。その前に立っている人全てが敵なのだ。心持早足でそこを通り抜ける。

その先の参考書売り場で、私たちは無駄話をしながら様々な参考書を手にとった。

伊智子が欲しがっていた参考書は、数学のもので、お勧め参考書としてどこかで目にしたことがあった。

私もそれをパラパラとめくりながらしばらく考えるが、結局はそれを戻す。

なんとなく、伊智子に勧められて買う、という状況が気に食わなかったのだ。

時計を見ると、時刻はもう10時を過ぎていた。私たちは今度は本当の早足で駅へ向かう。

しかし改札へ向かう途中、優しい声が耳をくすぐった。

ふと立ち止まり、その声の方へ目をやる。どこにでもいるようなストリートミュージシャンだ。

ギター片手に歌っている。その男性の前にはひとり髪の毛の長い女性が座ってそれに聞き入っていた。

「弥重？」

伊智子の声で我に返り、そこから目を離す。
彼の声はそれでも私の耳から離れなかった。

* * * * *

翌日。私は伊智子に適当な理由を言って、塾帰りひとりでまた市内の本屋に来ていた。

あれから一日。伊智子が持っている参考書を自分が持っていないことがひどく不安でたまらなかった。

急いで本屋に行き、同じ参考書を購入する。千円札数枚でこの不安から逃れられるのなら安いものだ。

しかしそれでも伊智子を誤魔化して買うのだから、つくづく自分は負けず嫌いだな、と思う。

その帰り道、また同じように駅で歌っている人がいた。

駅や周辺で歌っている人は数人いるが、彼の声が一番よく響いているように感じた。

歌も、やさしくゆっくりと心に響く。

私の足は自然とその人の方へ進んでいた。

近づくほどにはつきりとしてくる彼の輪郭。

ギターを走る指先。大らかに揺れる上体。歌の調子に合わせてかすかに宙を舞う短い髪。そして駅の屋根ごと月を貫くように歌い上げる姿。

私はその姿にすっかり見とれていた。

歌い終わったとき、男性の前にいた女性が拍手をした。つられて私も手を叩く。その音に黒髪の女性がこちらを振り返った。

黒目がちな瞳に、長い黒髪。リスのようなその顔には見覚えがあった。

「あ……青葉っ！　さん？」

「……あれー。深水弥重さんだ」

「え、まじでっ?！」

歌っていたのは、所田慶介。二ト予備軍の彼だった。

* * * * *

「まあまあ、遠慮なく! どんどん食べちゃって!」

私は二人に連れられてファミレスに来ていた。帰って勉強したいという私を無理やり連れ込んだのだ。ご馳走するから、という言葉で。

つまり、買収だ。『先生には内密にしてください』という、口止め料ってやつだ。

「いただきます」

遠慮なく目の前に置かれたハンバーグにナイフを入れる。

「でもまさか、クラスの人に見られるとはなあ」

クラスの人。その言い方にムツとする。確かにそうだけど、この二人のいうクラスの人とは私たちの言うそれとは大分違うように感じた。

「そうだねえ、確かに驚きだよ」

「しかも、拍手してくれたし」

「やっぱり、あそこで歌うようにしてよかったなあ」

「慶介は、歌上手なもの」

慶介。その響きに自分でも驚くぐらい肩がびくりと反応した。ナイフを入れた先から肉汁があふれ、まだ熱をもつ鉄板がじゅうと音を立てる。

隣の席には大学生のような二人組みが楽しそうに食事をしていて、目の前にいる二人も隣の二人と相違ない。私服のせいだ。制服を脱いだ二人はひどく大人っぽく見える。どちらも地味な格好をしているが、それでも制服を着ているときよりずっと大人びている。

何も食べていない二人の前で、制服でハンバーグを頬張る私。

歳も学校もクラスも一緒のはずなのに、どこか違う。

こんなところ、『クラスの人』に見られたらなんて思われるだろう。

ハンバーグを半分ほど食べ終えたところでナイフとフォークを一
旦手から離れた。

「あれっ、深水さんもう食べないの？」

所田が大げさに身を乗り出してハンバーグを指差す。

「もったいないな。深水さんって少食？ だからそんなに痩せてるんだ」

「単に夕食済ませてただけだから」

「ああそつか……。塾行つてたんだ？」

当たり前でしょ、とだけ言い放ち、私は口をティッシュで拭つた。安っぽいソースの色がくつきりと残る。ついでに腕時計を見るともう11時前だ。そろそろ帰らなくては。

「別に、こんなおごつたりしなくても先生に言いつけたりなんてしないわよ」

「へ？」

所田と青葉が両方ともきょとした顔で私を見つめる。

「だから、チクンないって言つてんの」

「え？ チクる気だったの？！」

「いや、違うけど、こうやって口止め料のハンバーグ奢るからさ、一言言つておこうと……」

「口止め料？」

その途端、所田が大きく首を振り、体を前に乗り出した。彼の息が顔にかかるほどの距離に近づき、私は少し動揺する。

「違うよ！ 深水さん、俺の歌立ち止まって聞いてくれたでしょ？
！ そんな人初めてだから、嬉しくて、そのお礼だよ！」

口止めなんてとんでもないよなあ、そう言っただけ彼は振り返り、青葉に同意を求める。青葉はクスリと口元だけで笑い、そうねと答えた。

「まだまだ慶介は始めたばかりだから。奇跡に近いことなの。今日他にもね、サラリーマンが一人、一瞬立ち止まってくれたけどすぐに去ってっちゃって。すごい良いスーツ着た人だったから、いい音楽ってやつが区別できるのかもね、やっぱり」

「でも、すごい、うまいじゃん……」

それに歌っている姿、かつこよかったし。その言葉は飲み込んだが、所田は両の目を大きく見開いて私の両手を強く握った。

「あ、ありがとうっ！ そんな事言ってもらえる日があるなんて……」

「うまくても駄目なの」

しかしその興奮を青葉が冷たく断ち切った。
所田は一気にしよげて、私の手をゆっくりと離し、背もたれのに身を預ける。

「上手いだけの人間ならごまんといえるのよ。全く、あんたは深水さ

んを見習いなさい」

「え？ 私？ なんで……」

言っちゃなんだが私は音痴で、カラオケもここ1年避け続けている。そんな私のどこを見習うんだと苦笑すると、青葉は大真面目に言い放った。

「だって一生懸命、目標に向かって努力してるじゃない。塾やらなにやら。特にあなたと斉藤伊智子さんはクラスでも目を見張るほどの努力ぶりだと思うわ。比べて慶介は、最近ようやくと曲を作り始めたのよ。どうにかストリートで歌うようにはなったけど。うまいとか下手とかそれ以前に慶介には努力が足りないのよ。ねえ、深水さんもそう思わない？」

そうなのだろうか。確かに青葉の言うとおりならば、努力不足の気がする。

「でも、歌の上手い下手って一種の才能じゃない、勉強と違ってさ」

「才能、ねえ。それもあると思うけど……。努力しないことには絵空事をうそぶくだめ人間にすぎないのよ。路上で歌う事だって、初めは嫌がってたのよ、慶介」

彼らを二ト予備軍とあざ笑っていた自分を棚に上げ、青葉の『だめ人間』という言葉の棘について反応してしまう。

「青葉……さん、随分冷たいんだね、所田君に」

似たもの同士なのに。いや似たもの同士だからこそ、なのか。

「うーん。というより、応援してるのよ。いや、イライラしているのかもしれない。才能とか夢とかそういう言葉に振り回されて、でも何もしない慶介に。折角こんなに歌も上手で、歌手になりたいという夢も見つけたのに、勿体ないじゃない」

思わぬところで所田の夢、しかも歌手になりたいという言葉が登場し、絶句する。高3の8月になってそんなこと本気で言っているのだろうか。

「歌手になりたいの……？」

「う、うん……。何その目……」

歌っているときとはまるで違う、自信のなさそうな顔で彼は一応肯定した。

私は、無理だよ、と言おうとしてやめた。

勝手にすればいい。二ト予備軍の考えることなんて知った事ではないのだから。

「俺だって無理だと思ってたけど、でも青葉がさ。とりあえずやりもせず諦めてどうする、っていうから、ギター猛練習して、ストリートで歌うようにしたんだ」

青葉が彼の言葉に付け加える。

「努力が報われるなんてわからない。だけど、努力しない事にはどうにもならない。スタートすらしないってことになるでしょ。結果はそれに多少比例するはずだから。大学も、夢も。深水さんはそれがわかってるからあんなに勉強してるのよ」

青葉の言葉は私を褒め称えていた。しかし、それが私には不愉快でたまらない。

これはいわゆる褒め殺してやつで、実はけなしているようにしか聞こえないからだ。

「何かずいぶん偉そうに言うんだね？」

「え、そう？」

私の嫌味に全く反応をせず、素直に彼女は聞き返してきた。
隣で所田が苦笑して口を開いた。

「うーん。こいつね、こないだ雑誌に漫画送ってさ。なんか特別賞？　みたいな受賞して、デビューが決まったんだって！　だからいちいち説得力があるんだよ」

「え……」

青葉は変わらぬ笑顔で微笑んだまま、頷いた。

ニート予備軍、の彼女はいつの間にか職を手にしていたらしい。
いきなり大人へぐつと近づいた彼女は、大した変化も無く話し続ける。

「でもだからって漫画家になれたとは思わない。高校の合間にね、プロのアシスタントに行ってるけど、私なんてまだまだだし」

それでもデビューだなんて、物凄い事ではないのか？

青葉には奢った様子も自慢する様子も無い。

私は心に浮かんだ疑問を、そのまま口にした。

「二人とも……受験しないの？」

思ったより弱々しい声になってしまい、自分でも驚く。
だがふたりは何の迷いも無くすぐに回答した。

「俺音楽系の専門行くよ」

「私はしないわ。これ一本でやっていくと決めたの。深水さんは？」

もしかして、このふたりは……なんていうか、馬鹿なんじゃない
だろうか。

私は呟くようにして青葉に答えた。

「国立……」

その途端、二人の顔が驚きで輝く。クラスの人としては標準的な
回答なのに、ふたりにとってはハイレベルな答えのようだ。

「すごい、さすが」

「すごくなにか……」

「どうしてそこを？」

将来立派な法律家になろうと思つて。

いつもは、そう答えている。こう言っておけば、大抵の人が良い
反応を示すからだ。だけどこの二人の前では通用しない気がした。

結局は伊智子に負けたくないのと、安定した学歴が欲しいだけに

すぎない。

「……」

答えられず俯く私に、二人の視線が容赦なく突き刺さる。

二人はいつも教室でこのような思いをしているのだろうか。夢に向かつて、同じように努力しているにもかかわらず、大学進学をしないというだけで『ニート予備軍』と後ろ指を指される彼ら。

「あ、もう１１時ね。そろそろ帰らないと」

そういつて青葉はおもむろに立ち上がる。

言外に『がっかりだ』という響きを感じるのは私の勘違いであつてほしい。所田もおろおろとしながらも、青葉に押され席を立つ。

「……待つてよ」

その言葉に二人がそのまま立ち止まる。

「悪い？ 夢もなくいいところに入りたいて思ってるだけじゃ、駄目？」

悔しかった。

私は間違っていないはずだ。少なくともあの教室では、こういう風に肩身の狭い思いをするのは私ではなくふたりのはずだ。

しかしどうして、今ここで、負けたような間違っているような、嫌な思いでいっぱいにならねばならないのだ。

言い放った後、二人の顔を睨み付ける。

しかしふたりともまたぼかんとした顔をして、あっけらかんと答えた。

「悪くなんかないわよ」

「うん。むしろすごいよ、夢もないのにそんなに頑張れるの」

拍子抜けする。

これで決まりだ。このふたりは馬鹿だ。

でもただの馬鹿じゃない。馬鹿正直で馬鹿真っ直ぐで馬鹿純粹な……そういう馬鹿なのだ。

ニート予備軍というあだ名は撤回しよう。

「……私も結局は馬鹿ってことが……」

名づけるなら、馬鹿負けず嫌い？

張り詰めていた肩をほぐしながら、私も立ち上がる。

ふたりとも、よくわからないといった顔をしていたが、それでもすぐに伝票を手に席を離れた。

* * * * *

「あ、やばい、もう電車来ちゃう。私先行くね」

切符を買ったのと同時に、私の乗る電車の名前が電光掲示板から姿を消した。

まだ買っている二人に別れを告げて私は走り出す。後ろから所田が叫ぶのが聞こえた。

「間に合わないんじゃない？ 今から走ってもー！」

意識して聞くと、彼は随分通る、いい声をしていた。改札を通り抜け振り向かずにはやく。

「絶対、間に合うよ」

私の声はきつと改札の向こうまでは届かないだろう。

傍から見ると馬鹿のように必死に走り、ホームへ向かう。

ホームに降り立つと、ちょうど電車が停車したところだった。

ほら、一生懸命走れば、電車に間に合うくらいはできるんだから。電車に乗ってしまえば、同じ。駆け込み乗車も、10分前から並んでいた人も。

どついう過程でも、どんなにかっこ悪くても、乗っちゃったもん勝ちだ。

私はそのままのスピードで電車に飛び乗った。

5 人目の加速（後書き）

『5 人目の加速』は、実は他の短編のシリーズもののため、本作の中では一番の長さになってしまいました。それにも関わらず、最後まで読んでくださった方には深く感謝申し上げます。

青葉伊鶴の偉そうな物言いに興味を持ってくださった方がいらしたら、『チバリヨウ』や『反転する世界にただ恋をして。』という短編にも彼女は登場しているのでは是非ご覧下さい。（所田慶介は前者のみです）

それでは貴重なお時間誠に有難うございました！

6 人目の再会

「ご、ごめんね、祐樹くん……」

目の前では、真つ赤な目を桃色のハンカチで支えるようにして、
洲上さんが泣いている。何で泣いてるのかって……俺にもわからない。

バイトから帰り道、改札の前で腕をつかまれた。驚いて振り向いたら洲上さんだった。

正直に言おう。そのとき一番に心に浮かんだ言葉は、『やばい』
だった。

そしてそれは顔に出てしまったのだろうか、俺と目があつた途端
彼女は弾けるように泣き出した。

「いやまあ……うん。大丈夫？」

改札前の柱のところで、洲上さんを覆い隠すようにして俺は立っていた。通行人から見れば彼女を泣かす駄目彼氏ってところか。どうか知ってる人には目撃されませんように。

携帯片手に必死の形相で走っている男が俺らのほうにちらりと視線をやるのが見えた。あんなに走りながら人の事を注目する余裕があるなんて大したものだ。

まるで俺が泣かしてしまった悪い奴だと周囲の人に責められているようで、とても居心地が悪い。それをせめて彼女に悟られないようにしながら、俺は所在無く彼女を見守っていた。

洲上さんはもう何度目になるかわからない言葉をまた繰り返した。

「うん、全然大丈夫、まあ私どうしたんだろうね？ 本当迷惑だ

よねえ。ごめんね……」

そういわれるとなんとも言い返すことが出来ない。そうだね、それじゃ、なんて言って立ち去る事も出来ない。それを狙って淵上さんはその台詞を口に行っているのだろうか。だとしたらすごい女だなと思う。彼女がそういう人間じゃないことは重々承知しているのだが。

二人の間に沈黙が流れる。

周囲の雑多な物音に、俺たちだけが取り残されていた。

淵上さんは、瞳から下をハンカチで覆って、鼻を少しすすった。その音だけが、俺たちの沈黙を少し和らげる。

淵上さんとこうして顔を合わせるのは随分久しぶりだ。けれど、淵上さんと最後に交わした言葉は今でもはっきりと思い出せる。

だから、祐樹くんは私と仲良くしてくれただね。

あの時淵上さんは口元では微笑んでいたけど、泣きそうな顔をしていたような気がする。彼女の傷ついた様子に動転するばかりで、本当に泣いていたのかまではわからない。長い廊下を走って去る後姿を呆然と見送るしかなかった。あれは今年の春のこと。まだ桜舞う長袖の季節に、俺たちの交流は途絶えた。

もちろん何度も弁解しようとした。でもその度に、諦めた。

彼女は俺が近づくだけで体をこわばらせていたし、何より俺の方もうまい言い訳が浮かばなかった。彼女を友達として、一人の人間として好きだという感情は確かにあった、だけど何ではじめに話しかけたか。それはダチのため……。結局何を言っても逆効果に思えて、俺はそのまま時の流れに身を任せるしかできなかった。

「瀏上さん……どうしたの？ 瀏上さんこの駅の近くに住んでたっけ？」

俺の記憶では彼女はこの駅の近くには住んでいなかったはずだ。悲しいことに俺は瀏上さんのことを事細かに知っていたし、覚えている。それが俺が彼女に近づいた目的でもあったから。

思ったとおり彼女は首を横に振る。

多分、偶然なんだろうな。白のタンクトップに黒いスカートという出で立ちから見ても、たまたまこの駅のある町で用事があった、その帰りに俺を見つけた……ってところか。

でもそうだとすると何故、腕をつかんでまで引き止めたのだろう。あのとき以来、ずっと避けられていたのに。

「……こうやって話すの。久しぶりだね……」

「あ。ん、そうだな……」

「もしかしなくても、あの日以来かあ」

「……うん」

「私、告白なんてされたの生まれて初めてだったんだよー？」

笑いを含みながら、瀏上さんは上目遣いで俺を見上げる。

「知ってる」

だって、瀏上さんから直接聞いたし。そしてそれもきちんとダチに伝えたし。

俺は彼女の視線を受け止める事が出来ずに、彼女の立っている柱の向こうに目をやって答えた。

瀏上さんが生まれて初めて告白された相手は、俺の親友でもある。そいつの気持ちは紛れもなく本物で、俺は純粹にそいつの手助けをしたいと思ってただけだった。

噂話の少ない、まじめなタイプの彼女に一番初めになんて話しかけたのかは、よく覚えていない。あまり男子生徒と話さない瀏上さんは俺のなれなれしい態度を嫌がっていたのは覚えている。

「そんな事も言っただけー私？ うわー……恥ずかしいなあ……」

彼女は、ははつとハンカチの下で笑ってみせる。

俺、瀏上さんの恋愛話ならほとんど知ってるよ。言葉にせず心で呟く。

だけどその分瀏上さんも俺の恋愛について詳しく知っているはずだ。二人でなんと盛り上がっただろう。少なくとも話しているときには『ダチのため』なんて意識はなかった。ただ一緒にいる時間が楽しくて、面白くて。でもそれは彼女にとって全部作り物にしか思えないのだろう。当然だと思う。

「……ごめん、な」

瀏上さんの目が大きく開かれる。

やっぱりそれを直視する勇氣はなく、俺は頭を下げた。

薄汚れたスニーカーと、薄汚れた床だけをただただ見つめていた。

「本当、ごめん。今さら何て言ってもいやな思いするだけだと思うけど、俺は本当に夏……瀏上さんと友達として楽しく接してただけなんだ。だから……」

「瀏上さん、か」

「え」

「だったら私も祐樹くんじゃなくて林くんって呼ばなきゃダメかな」

俺たちはお互いを名前で呼び合うほどに仲良くなっていた。それを知ったダチがぶち切れたのは言うまでもない。それでも俺は夏輝のことを友達としか思えないのは本当だったし、どうにか宥めただれど。あの日以来、その名を呼ぶことすら封印してきた。

「いや俺なんてもう何とでも呼んでくれて構わないし！」

「ふふつ。じゃあ、私も。夏輝に戻してよ」

「う、うん……」

「ほら頭も上げて！」

いつのまにかハンカチをしまった夏輝は、もう泣いてはいなかった

た。その目元や鼻は赤く染まっているけれど。

「ね、覚えてる?」

「何を?」

「祐樹くん教えてくれたじゃん、春からこの駅の近くでバイト始めたって」

「そういえば、教えたかも」

そうか、ちょうど彼女と仲良くなった頃にバイトも始めたのだった。

「まだ、そこで働いてるんだね。今日は一か八かで来てみたんだけど、まさか会えるとは思ってなかったよ。改札口のところで祐樹くんの姿見つけたときは、本当に驚いて感動したんだから……って泣いちゃったけどさ」

肩まである髪が、彼女の動きと一緒にかすかに揺れる。

「でも、一か八かって……どうして? もうすぐ学校始まるし、会えるじゃん」

こうして夏輝と、形だけだとしても仲直りに近づけたことは嬉しい。それでも、そこまでして駆けつけてくれる夏輝の真意が俺には読み取れない。

夏輝は、その瞳をゆっくりと閉じた。長い睫の先は彼女の呼吸よりも早く震えている。

口元に、静かな笑みをたたえたまま、夏輝は口を開いた。

「私、転校するんだ」

一気に、夏輝以外の音が遮断される。

「こんな時期なのにね。親の都合ってやつで」

彼女の瞳は濡れているが、それでも一生懸命優しい形を保とうと頑張っている。あの時と同じだ。事が終わって、一人教室から姿を現して、ドアの前に立っていた俺に向かって最後の言葉を発したあの時と。

電車の発車を知らせる音で、俺の聴覚が生き返る。数人の走り出す靴音と、何か話す声。

突然の変化に少し意識が混乱した。やけに、通る声が耳に残る。

間に合わない、今さら走り出しても。もう間に合わない……。

「本当はね、9月いっぱいには登校できるはずだったんだけど、急にそれもできなくなっちゃって。こないだの出校日が、事実上最後の登校になっちゃったんだ。それで……それで、ね。祐樹くん、会って話したくて。あの時とか、それから後の態度ですごく傷つけちゃっただろうなって……思ってた」

両手を胸元で硬く握り締めて、震えながら謝る夏輝の言葉を俺は

遮る。

「そんなことない。俺が悪いんだし。俺、夏輝の気持ち考えずに、接してて……本当に悪気はなかったんだ。お前と話しててすげえ楽しかったしさ。でもだからって友達にその話全部伝えたりして、俺馬鹿だなあって、お前怒るのも当然だわって思ってた……」

言いながら、自分の声がどんどん小さくなるのがわかる。どれだけ言葉を並べても、自分の気持ちなんて表しきれないし、今さらなんて言おうと言い訳に過ぎない。

両手が汗ばんでいてひどく気持ち悪くて、何度もジーンズにこすり付ける。

夏輝は静かに首を振った。

「そりゃ……傷ついたよ。私男の子にあそこまで心開いて話できたの初めてだったから。自分の過去の恋愛に興味持ってくれる人もいなかったし。純粹に嬉しかったの。だからそれが祐樹くん自身じゃなくて、お友達のためについていう目的から来てたのかって思うと、私たちの友情っていうの？　そういうの全部嘘なんだなあって……思ったのも事実だよ」

夏輝の潤んだ瞳はまっすぐ俺を見つめる。

「でもさ……私、顔見て泣けるくらいに」

雫がほろり、重力にひかれて夏輝の白い肌の上を滑り落ちた。

「祐樹くんのが好きなの……。だから、だから……。結局、嫌いになってなれなくて。友達としてでいいから、近くにいたくて。でも祐樹くんはそれすら嫌なのかもしれないって悩んでるうちに、転校が決まっちゃってさ……」

好き。好き？

あの日の、夏輝の悲しそうな顔が、目の前の彼女と重なる。そう
だ、彼女は好きな人がいるといっただけ友達をふっていた。それが、俺
……？

夏輝の急な告白は、俺を混乱させた。夏輝が転校する？ そして
俺が好き？ それを伝えるためにわざわざここまで？

体中が心臓になったように激しく打ち震えている。何を言えばいいのかわからずためらっている俺に、先ほどのハンカチであの透明な雫を拭い去った夏輝が笑顔で言った。

「それだけ！ それだけ言おうと思って！」

耳に残る、音。あとき駆けていた人は電車に乗れたのだろうか？

「本当迷惑だよな、ごめん。忘れてくれて構わないから」

走ったけど、間に合わなかったのだろうか。

それとも走りもせず次の電車にしたのだろうか。

それとも……。走った事で無事乗ることができたのだろうか。

「じゃあ……。それだけ、だから……。じゃあ、ね」

夏輝はそつと柱から体を離し、俺の下を立ち去る。

待て、そうは思っても声にはならない。震えっぱなしの体はびくともしない。

俺はまた立ち尽くすだけで、夏輝を傷つけるばかりで、流れに身を任せるしかできないのか。

走れば、間に合うかもしれないのに。

途端に固まっていた右足に感覚が戻る。

思い切りそれを前に踏み出し、体を回転させて、彼女の名を呼ぶ。

「夏輝！ 俺は」

改札口で振り向いた彼女の髪が、風に乗って舞い上がる。

そしてその瞳は、俺の言葉に引かれるようにまたも透明な雫をこぼすのだった。

7人目の疾走

夢中で駅を駆け抜ける俺の視界に、若いカップルが入り込む。柱に身を預けた女の子は、ハンカチで顔を覆い泣いていた。

その様子が未来と重なり、焦った俺はさらに速度を上げる。

未来にはああやって慰めてくれる彼氏が今はいないのだ。もっとひどい様子で泣き喚いているかもしれない。

ポケットに財布、手には携帯。それだけの荷物で俺はベルの鳴り響く電車に飛び乗った。扉に一番近いところに立って、目的地へ早く到着するように、機械の箱に念じる。

時間を確認するために携帯を開くと、後輩からのメールが表示されたままになっていた。

『すみません。振られちゃいました。俺が悪いのはわかってるけど、でもやっぱりきついっす。多分、一人で泣いていると思うから……先輩、よろしくお願いします。俺が行くよりきつとずっといいはずだから』

中途半端なメール。だが俺には後輩の言いたい事は痛いほど伝わってきた。

だからって後輩の肩を持つ気はない。高校の頃から付き合っている年上の女がいながら、大学進学で県外に行った途端、そこで次々と女を作って遊んでいたあの後輩の事など。

まあ、優柔不断を絵に描いたような奴だ、そうなるのは自然の摂理なのかもしれない。

でも、後輩をそういう奴にした原因は少なからず俺にもある。そ

の点については謝らねばならない。

『おい、未来今どこ？ あいつから全部聞いた。家いんのか？ 電話出るよ』

俺はずっと未来の側にいた。悪友として親友として時に男として。彼女はよく男女の友情に関して、俺のことを例に出し成立すると声高に言ったものだが、残念はずれだ。俺に関しては、少なくともはずれ。

俺はずっと、あいつが後輩と付き合う前からずっと……好きだったのだから。

だから知ってる。あいつが後輩の事どれだけ好きで、どれだけ傷ついていたのか。知っている。

そして後輩が、俺の思いに薄々勘付いていたことも。そのせいであらぬ妄想に苦しみ、彼氏としての自信を失いかけていたことも。知っている。

メールの返事は一向に來ない。

携帯といい電車といい、機械というものに俺の念力は一切通用しないらしい。……まあ、人にも効いたためしはないけど。

どこかで野垂れ死んでんじゃねえだろうな。全く気の強いところがあだになるっていうか、こういうとき絶対未来は人に頼ったりしない。だからこそ心配なのだ。

扉に設置された窓の向こうには、夜の闇とそれを照らすイルミネーションがひたすらに流れていく。光と闇の奔流を背景に、唯一つ動かない影のような姿。窓には、気弱そうに眉を下げた俺の顔が映っている。

俺は、最低なのだろうか。

あいつと後輩が別れたという知らせに、あいつを心配する気持ちよりもそれを喜んでしまう自分がいた。そんな自分の心に、俺はどう対処していいのか全くわからない。

それでも、奔流の中佇む俺の目は、あいつの事だけを見つめていた。

いきなり奔流が途切れ、気弱な俺もその姿を消す。

車内アナウンスが、待ちわびていた駅名を告げた。

急いで電車から降り、改札に向かって階段を駆け上がる。

携帯の発信履歴にいくつも表示された未来の名前を、もう一度選択した。

彼女の家の最寄り駅についたものの、あいつが素直に家に帰っているのかわからない。

居酒屋にいるかもしれないし、友人の家にいる可能性も……ないとは言えない。

コール音をBGMに階段を登りきるが、未来の応答はない。携帯の向こうでいい加減聞き飽きた女が留守番電話に接続する旨を俺に伝える。

舌打ちを返事に女を黙らせた。

未来に繋がらない役立たずの携帯をポケットにねじ込む。

どうしようか。

とりあえず、あいつの家に行つて様子でも見てみるか……そう思ったとき。

泣き声？

幻聴だろうか、未来の泣き声が聞こえるような気がした。

しかし周囲の人の様子を見渡すと幻聴ではないらしい。数人の人が立ち止まって辺りを見渡して、改札に向かっていた。

俺はその声の元を探す。

泣き声なんて、誰でも同じようなものかもしれない。でも俺には、泣き声の中に未来の周波数をかすかだが感じ取る。

この感覚はいつごろから身についたものだったか。

好きだから、といったらそれまでだけど、とにかく勘というかなんというか、わかるのだ。俺は。

姿無き声の発信源は、思いのほか早く見つかった。

証明写真の撮影機、である。その中から、あいつの泣き声は響いていた。

間違いない。

俺はカーテンを一気に引いた。

「未来」

やっぱり。

未来はその小さな空間で泣いていた。

目の周りを真っ黒にして、鼻を真っ赤にして、下唇を突き出して。

「……こんなところで何泣いてるんだよ、全く……」

左手を機械に持たれかけ、未来の顔を思い切り覗き込む。けれどそれを嫌がる様子もなく黙ったまま未来は俺をにらみつけた。

「そっちこそっ、何で、いるのよ」

未来にとって俺に泣き顔を見られるのは初めてのことではない。初めてではないとしても、多少の恥じらいはあるらしい。そのぶっきらぼうな話し方にはそれが少しだけ滲み出ていた。

「ん、全部聞いたよ、あいつに」

あいつ。未来の元彼氏で、浮気者の、俺たちの後輩。

「く、口が軽いんだから、もうっ」

しかめっ面をして悪態をつく未来は、いつも通りの彼女だった。
……その崩れた顔以外は。

「ほら、とりあえず帰るぞ」

未来の腕を取り、立ち上がらせようとする。しかし未来の体は思った以上に硬く、動かない。

「う……」

突然彼女は小さく呻いた。

「おい……?」

気分でも悪いのかと、つかんでいた腕を放し、彼女と同じ目線にしゃがみこむ。

「好きなの。本当は、結婚だってしたい。ずっと一緒にいたい……」

吐き出すようにそういうと、未来は両手でデニムのハーフパンツを握り締めた。彼女の顔もその手に向けられている。

赤くなるほど握り締められた拳は、その思いを俺に証明するかのようにはるばると震えている。

無性に、腹が立った。

いくら彼女があいつのことが好きだと知っていても、こう直接告白されるのは正直つらい。少しいらだった口調で俺は問い詰めてしまっ。

「じゃあ、なんで別れたんだよ」

「だって……！」

髪が乱れるのも気にせず、未来は思い切り俺を見上げる。視線が合った途端、その顔は大きく悲しみに染まった。

「だって、無理なの。耐えられないの。他の女抱いてる彼許せなかったの。私そんなに大人じゃない、彼は年上ってことを勘違いしてる。私のこと全然わかってない。なんでも許してくれるのが年上だって。だから馬鹿なのよ、若いのよ。もう、さっさと忘れ去ってやるんだから」

そう一気に言い切ると、唇を噛み締めて、彼女はその悲しみに身を任せた。

わかってた。俺は、誰よりも未来が年上の彼女としてのポジションに苦しんでいるのを知っていた。なのにそれを彼女の口から言わせてしまった。それがどれだけ辛い事が、彼女の顔を見れば一目瞭然なのに。最後の言葉だって、要はまだ忘れられそうにないという思いの裏返しに過ぎない。

「ごめん……。でも、あいつメールで言ってたよ。一人で泣いているだろうから、迎えに行ってくださいって」

「……何、それ」

興味のなさそうな口ぶりとは裏腹に、かすかに『元彼女』の顔が見え隠れする。

俺はまた、あの後輩の株を上げてしまったようだ。

ため息の代わりに、大きく息を吸う。

それら全てを吐き出すように、俺は思い切り立ち上がった。

「……よしっ！ 飲むか、今日は！ な」

「うっ……奢って……」

そういうところはちゃっかりしている。好きな女に泣きながら言われたときたら、断れる奴がいるだろうか。

「しょうがないなあ」

今度は腕を掴まずに、右手を未来に差し伸べる。

彼女はデニムで一拭いた後、左手を俺の右手に重ねた。

キラリと光る薬指ごと、俺はそれを包み込む。

「最後まで付き合ってよ？」

「……しょうがねえなあ」

湿った手のぬくもりに、頬が緩みそうになる。

しかし時折指先に感じる冷たい金属の感触が、それを見事阻止してくれた。

指輪。左手の薬指には、まだ指輪がしっかりとめられている。

恐らく朝どころか明日の昼まで俺はつき合わされるに違いない。悲しいことに未来の方がずっと酒に強いのだ。しかも、泣き上戸。いや、でもそれで未来の気が晴れるなら、大したことではない。

「優しいんだねえ」

「え」

意外な未来の言葉に、不覚にも顔が熱くなる。いや俺は、そんな失恋の悲しさにつけこむような男ではない、はずだ。それでも未来の褒め言葉はめったになくて、俺は舞い上がる。いや、舞い上がりかけたところで、未来はきっぱり言い放った。

「男なんて、身勝手で、中途半端に優しくて、でも結局が一番自分自身に優しいからもういらない！」

舞い上がりかけたところを一気に地面に叩きつけられる。

予想外の衝撃に少し（いや大分）へこみながらも、そうやって怒れる分元氣があるのだと安心もする。ふらふらと歩く彼女を支えながら、喉元まで競りあがる言葉を、一生懸命飲み下した。

俺が、いるじゃん。

改札を抜け、未来が行きつけの居酒屋を口にする。その左手は、確かに俺の右手を強く握り締めていた。

……薬指のリングもセットだけど。

最終電車を知らせるアナウンスが駅に響き渡る。

俺は未来と共に歩き出した。明日電車に乗り家に帰る事はできるのだろうか、と少し心配しながら。

7人目の疾走（後書き）

最後までお目を通してくださり、誠に有難うございます！

一話目の主人公未来に戻ったところで junction は完結となります。電車やバス待ちのお暇つぶしに読んで頂けたら、これ以上幸いなことはありません！

ご覧のとおり、まだまだ未熟者です。修行の意味も兼ねて短編集、しかも恋愛含に挑戦してみました……。まだまだ課題は山積みです。

これからも精進して行こうと思います。

それでは貴重なお時間、有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9220a/>

junction

2010年10月17日03時48分発行